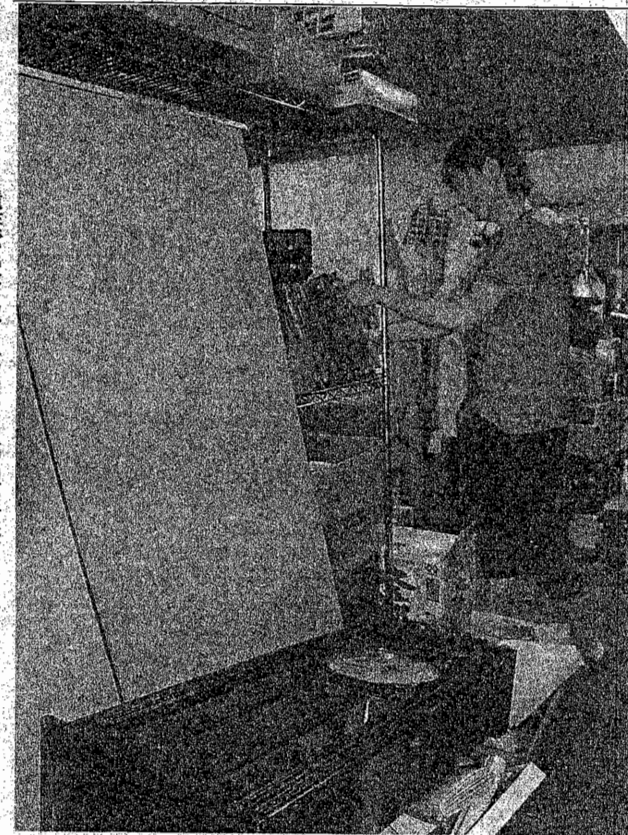


不明高齢者 全国で続々

進む無縁化



遺族が受け取らなかった遺品が所狭しと並ぶ
1ツ・オフ・ジャパンの倉庫―札幌市豊平区

100歳以上の高齢者の所在不明が全国で相次ぎ、家族のきずなが希薄化した現実があらためて浮き彫りになっている。道内でも都市部を中心に、身よりのない人たちが増える「無縁社会」が進行する。所在不明の高齢者

に自らを重ねるお年寄りや、孤独死した人の遺品整理を行う業者、引き取り手のいない遺体を吊る葬儀社。無縁の現実を直面する人々を訪ねた。

(報道本部 徳永仁)

家族希薄化

現場ルポ

91歳独居女性

おいが年金無心

「私もこうなっていたかも知れない。札幌市北区の高齢者向け住宅に住む女性(91)は、東京都足立区で111歳の男性が遺体で見つかり、家族が年金を不正受給していたニュースをテレビで見ながら3年前の自分を重ねていた。当時、1人で暮らしていた札幌市東区の家賃2万円のアパートは、弁当の空き容器などのごみで埋まり、ネズミがはい回っていた。一度、ごみの分別の仕方を間違えて近所と

トラブルになって以来、恐怖心からごみを収集に出せなくなってしまったためだ。独身だったため、親族は6代のおい1人。市内で別に暮らしていたが、年金を無心させられたり、借金の肩代わりもさせられたという、月約15万円の年金は、家賃を払うといつも1、2万円しか残らなかつたという。

3年前の夏、部屋で熱中症で倒れていたところを偶然訪れたケアマネジャーに発見された。保護され、現在の住宅に引越して以降、おいからは一切連絡がない。女性は「私が今死んでもおいは来ない。(おいのことは)考えるのも嫌。1人でさよならしたい」と話す。

同社が遺品整理を始めた4年前は月5件ほどだったが、現在は3倍の15件前後。遺族に「遺品は一切いらぬ」と言われることも少なくない。そんな態度に触れるたび、湊さんは「家族関係が壊れてしまった現代の縮図だ」と感じている。

孤独死男性長男

遺品「いらぬ」

遺族の依頼を受け、全道で遺品整理を行う1ツ・オフ・ジャパン(札幌)の湊源道社長(35)は昨年夏、札幌市内

のアパートで孤独死した80代の男性の遺品を整理した際、旭川から駆け付けた60代の長男の態度に気持ちが沈んだ。遺品の中にあつた仏壇と、先祖の命日や続柄などを記録した過去帳。「どっぺおいた方がいいですよ」と湊さんが説得しても、長男は「そんなものいらねえ」と声を荒らげたという。

「最後まで迷惑かけやがって」「死」届は書いてやるが、金は出さないぞ」。遺体を前にいらつく親族。親族が火葬費用を出さない場合は、市が肩代わりする。同社の中島浩盟社長(49)は「遺体を見て涙した人は、今までに1人もいません」と言う。

親族、遺体引き取り

10件中6件拒否

札幌市中央区の葬儀会社「極楽堂はなや」は、市内で唯一、市の委託を受け、事故や病気で亡くなっても縁者に引き取られない無縁仏を用いる。

無縁仏は天涯孤独や身元不明のケースがあるが、最近では親族が分かっていても、引き取りを拒否することが多い。昨年扱った10件中6件は親族が拒否したケースだった。「最後まで迷惑かけやがって」「死」届は書いてやるが、金は出さないぞ」。遺体を前にいらつく親族。親族が火葬費用を出さない場合は、市が肩代わりする。同社の中島浩盟社長(49)は「遺体を見て涙した人は、今までに1人もいません」と言う。

札幌市で高齢者のネットワークづくりなどに取り組んでいるNPO法人シースネットの岩見太市代表(69)は「本州に比べて一族の歴史が浅い北海道は、家族や親族との関係が希薄になりやすい」と指摘。「家族が支え合うことが難しくなっている以上、他人同士が肩を寄せ合って暮らしていくような仕組みも考えていくべきではないか」と話している。